

巻頭言

宮田 光

東海学園女子短期大学国文科が発足したのは、昭和四三（一九六八）年四月のことである。専任教員は、北条秀雄、熊谷武至、関山和夫、田島毓堂、小島幸枝と私の六名であった。一回生は八〇名程だったように思う。研究室と称する狭い一室に教員六人が机を並べ、部屋の隅には空の本棚が一つあるだけであった。それでも私達は新しい学科を充実させようと意気盛んであった。学科の予算の殆ど全てを図書の購入に充て、春と秋には文学探訪を行い、学生生活の総仕上げとして卒業論文を課した。

東海学園国語国文学会を発足させ、会誌として『東海学園 国語国文』を創刊したのは、第一回の卒業生が巣立った昭和四五（一九七〇）年七月のことである。私達はその後も研究・教育の充実に努め、学生の自習のための基本図書揃えた読書室を設け、国語学・古典文学・近代文学のそれぞれの専門書を揃えたそれぞれの演習室で少人数の演習を行い、更に日本文学、日本文化、文芸の三コースを設置して、多くの優れた先生方にご指導を頂いた。教員集団の団結と少人数教育の達成度では、全国の国文系の短大の中でも屈指の存在であったと自負している。

しかし、短大から四年制大学へという流れの中で、本学でも国文学科と英文学科を再編して、四年制大学に改組するという構想が起こった。東海学園大学の人文学部が発足したのは、平成一二（二〇〇〇）年四月のことである。

それに伴い、学会名を東海学園日本文化学会に、会誌名を『東海学園 言語・文学・文化』に改めた。第一号

は通巻第六〇号にあたる。その後、細々ながら活動は維持されたが、遂に、経費の面でも人材の面でも学会の活動を継続するのが困難になり、今回の第二一号（通巻八〇号）を以て終刊号とするに至った。

人文学部になってからは、間口が広くなり、学生指導にも焦点が絞りにくくなったように思う。この学会誌も、短大の頃は優秀な卒業論文を掲載することもあったが、今は教員の論文のみとなってしまった。それでも、このささやかな学会誌は、私達の研究生生活の支えであり続けたし、微力ながら、本学の研究教育にも資するところがあったと信じたい。

創刊から数えて五三年、当初のメンバーで生き残っているのは、田島毓堂氏と私の二人だけとなった。長生きしてしまったために、終刊号の巻頭言を書くことになり、昔のことばかり書いてしまった。

創刊号以来、学会を支えて下さった会員の方々、卒業生の皆さん、また、御多忙の中、終刊号にご寄稿下さった会員の方々に厚く御礼を申し述べたい。

最後に長年にわたって、本誌の印刷・製本に尽力していただいたイシグロ高速印刷には深く感謝する次第である。

令和五年（二〇二三）七月